

<前回> 後期オリエンテーション

Ⅲ 東アジアの近代化とキリスト教思想

オリエンテーション

1. 「アジアのキリスト教」研究をめぐる方法論的考察

1-1: 研究状況と問題点

1-2: 「アジアのキリスト教」の問題構造

2. 「アジアのキリスト教」の諸問題

2-1: 近代化・貧困・開発

2-2: 伝統的宗教文化と家族

2-3: ナショナリズム

2-4: 宗教的多元性と宗教間対話

12/1

1/12

Exkurs ティリッヒ研究 1

12/8

ティリッヒ研究 2

1/5

1. 「アジアのキリスト教」研究をめぐる方法論的考察

2. 「アジアのキリスト教」の諸問題

2-1: 近代化・貧困・開発

2-2: 伝統的宗教文化と家族

2-3: ナショナリズム

(1) 儒教的伝統：家から国家へ

1. 森岡清美『家の変貌と祖先の祭』日本基督教団出版局、1984年。

「重層的な祖先観」「近世以前の豪族名家の系図に現われる「伝承的」もしくは「擬制的祖先観」と、近代の家族国家観の基礎とされた「抽象的なイデオロギー的祖先観」(108)

「「祖先教」とは、明治中期から後期にかけて活躍した法学者穂積八束（一八六〇—一九一二年）が好んで用いた語である」「祖先教とは、わが国近代の国家権力が民衆に示し、民衆に受容と実践を迫った、祖先を介して家と国家を結びつける信念体系である」(109)

「政治学者の研究によれば、いわゆる家族国家観が十全な形で公的に登場するのは、明治四十三年（一九一〇年）使用開始の第二期国定教科書高等小学第三学年用修身書においてであった」(112)、「わが国は家族制度を基礎として国を挙げて一大家族を成すものにして、皇室は我等の宗家なり」、「家族国家観とは、集団としては国＝一大家族、したがって関係としては「皇位と国民」＝「父母と子」、また皇室＝国民の宗家、基本的倫理としては忠孝一本、という観念を含むものである」、「この修身書の修正を部長として担当した東京帝国大学法科大学長穂積八束は、わが国家族制度および建国の基礎に祖先教があり、これによって国家の倫理を維持して来たという」(113)

(2) 民族と国民国家

2. 近代国民国家 大澤真幸『ナショナリズムの由来』講談社、2007年。

「第二インターに集う社会主義者たち」「最も普遍主義的な理念に立脚していた者たちが、

特殊主義へと反転した。それは、レーニンをひどく驚かせた」(30)

「現代における最も普遍主義的な社会思想は、多文化主義 multiculturalism の形態を取るだろう」(30)「文化多元主義 cultural pluralism と対比」、「文化多元主義は、私生活の多様性を認めるところに主眼がある。それは公的な領域に関しては、それを——私生活の多様性を保証するためにも——統一的、一元的なものとする。それに対して、多文化主義は、公的な領域そのものの多様性・多元性を要求する。多文化主義は、文化多元主義が多様な生活様式への寛容を訴えつつ、実際には、公的な生活の一元性を保存し、擁護することの欺瞞と不徹底を批判するのだ。言い換えれば、多文化主義は、公的な領域と私的な領域との厳密な分割が不可能になったときに出てくる思想である」

「反人種主義」

3. 塩川伸明『民族とネーション——ナショナリズムのいう難問』岩波新書、2008年。

「「民族」の捉え方をめぐる対抗図式」

歴史解釈に関する「原初主義」と「近代主義」、運動の原動力の解釈としての「表出主義」と「道具主義」、哲学的な認識論の次元での「実在論」(本質主義)と「構築主義」(29)

「明治国家は幕藩体制よりもはるかに集権度の高い統一国家となった」(80)

「それまではゆるやかものにとどまっていた「国民」の一体感を強固化するために、天皇を頂点とする政治的権威の単一ヒエラルキー構造としての確立およびそれを正統化するイデオロギーの大衆レヴェルへの浸透が目指されたが、その道は曲折した」(81)

「幾重にも重層化される形で「国民」形成が進められたのである」(84)

4. 小熊英二『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社、1995年。

「戦前の大日本帝国は、多民族帝国であった」(4)

(3) 虚構としての民族、ナショナリズムの力

5. 小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会、2002年。

「民族の本質論的見方を批判」(3)

「民族同一性は主観的に生み出される虚構だという立場」(22)

「民族は虚構によって支えられなければ成立し得ない現象だが、我々の生存を根底から規定している現実でもある」、「虚構と現実とを二つの対立概念として捉える発想自体が誤まり」(59)、「信念が現実を創出するこの循環現象」(60)

6. 神話・物語の意味、宗教にとって神話・民族とは何か。

(4) なぜ、民族か？ アジアのキリスト教とナショナリズム

7. 蓮實重彦・山内昌之編『いま、なぜ民族か』東京大学出版会、1994年。

8. ナショナリズムとキリスト教、双方向的議論。

東アジアの他者としてのキリスト教、同質性としての民族を生成させるメカニズムにおける異質性としてのキリスト教、「キリスト教は西洋の宗教である」との言説の民族主義の文脈での機能。

↓

9. 日本、韓国、中国の比較研究

日本と韓国を両端としたスペクトル、その中に中国を位置づける。

10. キリスト教は民族・国民国家を超越するか？

Yes、そしてNo

11. 普遍・世界宗教(→普遍救済論へ)という理念と制度化された宗教の現実。

二つの J とは何か

自己超越的民族主義と普遍主義の自己相対化（自己限定化）の二重の運動

↓

閉じることによって開く

二つのレベルの交差

2 - 4 : 宗教的多元性と宗教間対話

(0) 宗教的多元性と宗教の神学

・ 東アジアの宗教文化

伝統としての宗教多元性（重層構造、遠近構造）

↓

諸宗教の相互交流（相互影響）、共生あるいは対立

今年度の概論講義（東アジア・日本のキリスト教）

・ 排他主義、包括主義、多元主義という類型論について

Aloysius Pieris, S.J., *Fire & Water. Basic Issues in Asian Buddhism and Christianity*,
Orbis Books, 1996.

Today the academic magisterium in the West has developed this theology in terms of three significant categories: exclusivism, inclusivism, and pluralism. (154)

extra ecclesiam nulla salus

potentially or anonymously Christians

to each religion its unique role in salvation

I am embarrassed when I am asked in classrooms and in public forums whether I am an inclusivist or a pluralist. The reason is not that I dismiss the paradigm that gives rise to these categories as wrong, but that I have found myself gradually appropriating a trend in Asia which adopts a paradigm wherein the three categories mentioned above do not make sense. For our starting point is not the uniqueness of Christ or Christianity, or of any other religion. (155)

The poor who form the bulk of Asian people, plus their specific brand of cosmic religiosity, constitute a school where many Christian activists reeducate themselves in the art of speaking the language of God's Reign, that is, the language of liberation which God speaks through Jesus.

the "cosmic" religiosity of the poor, this-worldly spirituality / their daily needs (156)

total dependence on God / they cry for justice / not secular, but cosmic / ecological / story

(157)

The churches take refuge in a more convenient kind of uniqueness which they spell out in terms of the theandric (God-Man-Savior) model. This makes no sense in many of our cultures where it often evokes the image of one of the many cosmic forces than of a personal and absolute Creator-Redeemer. Moreover, this model, utterly untranslatable into some Asian languages, suffers also from an ontology before which soteriology (concern for liberation) fades into insignificance.

(160)

where do exclusivism, inclusivism, and pluralism fit in here? If categories are needed at all in this new paradigm, my suggestion is the following three: syncretism, synthesis, and symbiosis.

Syncretism is a haphazard mixing of religion; something of the cocktail

That really does not exist among the poor, but is attributed to them by "observers".

Synthesis is the creation of a *tertium quid* out of two or more religions, destroying the identity of each component religion.

symbiosis of religion. Each religion, challenged by the other religion's unique approach to the liberationist aspiration of the poor, especially to the sevenfold characteristic of their cosmic religiosity mentioned above, discovers and renames itself in its specificity in response to the other approaches. What I have been describing as Christian uniqueness in the BHC experience reflects both the process and product of a symbiosis. It indicates one's conversion to the common heritage of all religions (beatitudes) and also a conversion to the specificity of one's own religion as dictated by other religionists. You may call it interreligious dialogue, if you wish. (161)

BHCs:Basic Human Communities

(1) ティリッヒの「宗教の神学」

(芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年。)

1. 宗教現象学・宗教史学→類型論、動的類型論

比較という作業：三位一体論の位置（多神教、一神教、三一神教的一神教）

Systematic Theology. vol.1, 218-230.

生の弁証法的運動（生ける神）、キリスト論



キリスト教教義としての三位一体論

2. 対話をめぐる諸問題

・対話の条件：*Christianity and the Encounter of the World Religions*, 1963.

(Paul Tillich. *Main Works*, 5), p.313

- (1) 相互に相手の宗教の価値を承認し合うこと。固有の真理性をもつ相手。
- (2) 対話の当事者がそれぞれの宗教を代表していること。自らの宗教に対する確信と説明能力。
- (3) 共通基盤(common ground)の存在。 cf. common basis
- (4) 相手の批判に開かれていること。

cf. ハーバーマスの普遍的語用論 (Universalpragmatik)

コミュニケーション的言語使用の成立条件 (妥当請求) :

理解可能性(Verständlichkeit)

真理性(Wahrheit)

正当性(Richtigkeit)

誠実性(Wahrhaftigkeit)

理想的発話状況とその先取り (終末論的構造)

互に妥当請求を承認していることを相互に理解していること……

Jürgen Habermas, *Vorlesungen zu einer sprachtheoretischen Grundlegung*

der Soziologie (1970/71), in: *Vorstudien und Ergänzungen zur Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp, 1984.

Nicholas Adams, *Habermas and Theology*, Cambridge Univ. Press, 2006.

Stephen C. Levinson, *Pragmatics*, Cambridge University Press, 1983.

・対話の意義あるいは動態

対話を媒介とした自己理解の深化

cf. 内省による自己理解、現象学と解釈学

自己と他者の動的連関

理解と批判の媒介

他者と批判を経由する自己理解

・対話の主体

個人／共同体／思想

公式の教会組織との関わりを持ちつつ、その周辺で

解放の神学、あるいはキリシタン

基礎的共同体 (Pieris, the basic communities)

組、講 (狭間芳樹「近世における民衆と宗教——キリシタンと一向宗」、

芦名定道編『比較宗教学への招待』晃洋書房)

現代日本、現代の東アジアでは？

スピリチュアリティ・個人主義以降の共同性

↓

個人と共同体との関係性についての理論構築が必要。

人格と共同性

3. 啓示史

・ gradual revelation (漸進的啓示、Gregory of Nazianzus)、二段階あるいは三段階

・ 原啓示(Ur-, Grung-)と救済啓示(Heils-)

ルター派的神学の伝統(？、古屋安雄『宗教の神学——その形成と課題』ヨルダン社)

Paul Althaus

・ 啓示史(The History of Revelation. ST1, pp.132-144)

original / dependent

final, center

preparatory, receiving

キリスト

旧約 (イスラエル)、教会

・ 啓示は歴史的である。

cf. Offenbarung als Geschichte (Pannenberg)

この連関において、諸宗教の神学的評価は可能にある。

啓示の歴史から宗教の歴史へ (啓示と宗教の相関性)

啓示の準備と受容の歴史としての宗教史

基準 (意味付与原理) としてのキリストの出来事

(2) 土着化論と接木

1. 旧約聖書から新約聖書へ、イスラエル史の規範性

これとの類比で諸伝統が評価・解釈される

コーンの解放の神学

James H. Cone, *God of the Oppressed*. The Seabury Press, 1975.

Having described the two sources of Black Theology (black experience and Scripture), it is

now important to distinguish both sources from their subject or essence, which is Jesus Christ. The subject of theology is that which creates the precise character of theological language, thereby distinguishing it from other ways of speaking. By contrast, the sources of theology are the materials that make possible a valid articulation of theology's subject.

Jesus Christ is the subject of Black Theology because he is the content of the hopes and dreams of black people. (32)

2. 旧約としての武士道

「私は、神はすべての民族や国民——異邦人であろうとユダヤ人であろうと、キリスト教徒であろうと異教徒であろうと——と「旧約」と呼んで差支えない契約を結ばれた、と信じている。」(新渡戸稲造、佐藤全弘訳『武士道』教文館、29頁)

「余輩も新渡戸稲造氏がその著書で説きしと伝えらるるごとく、武士道は神が特に日本に賜わりたる旧約なるべきを信ず」(植村正久「武士気質」、『植村正久著作集 第一巻』新教出版社、413頁)、「しかれどもわが国には幸い武士気質なるものの存するあり。確かにキリスト教を待つ旧約たる資格を保てることを疑わず」(414)

3. 接木論の危険性

・武田清子『異端と背教——伝統的エトスとプロテスタント』新教出版社。

・「武士道は日本国最善の産物である、然し乍ら武士道其物に日本国を救ふの能力は無い、武士道の台木に基督教を接いだ物、其物は世界最善の産物であつて、之に日本国のみならず全世界を救ふの能力がある、今や基督教は欧州に於て亡びつゝある、而して物質主義に囚はれたる米国に之を復活するの能力が無い、茲に於てか神は日本国に其最善を献じて彼の聖業を扶くべく要求め給ひつゝある……」(内村鑑三「武士道と基督教」1916年)

↓

・問題点：

(1)何を「旧約」的な位置づけのものとするか

伝統的な宗教文化のどの層、どの領域を選ぶのか

ピエリスの言う cosmic religion の評価、民衆宗教に意義

(2)イスラエル史の規範性からの逸脱によるデーモン化

ドイツ的キリスト者

海老名弾正の神道的キリスト教

・「此の五箇の魂（クリスチャン魂・日本魂・教会魂・人類魂・宇宙魂）はたしかに一つである。何れも生命と勝利と進歩の魂である。其根本をいへば是れ実に神の霊である。…『太初に道あり』……其『ことば』道、即ちロゴズである。……之に生命あり……万物を生かし天地人生を指導す」(海老名弾正「予を慰むる五種の魂」『新人』1905年、吉馴明子『海老名弾正の政治思想』東京大学出版会、1982年、193頁)

↓

日本宗教史とキリスト教史との接続による、神道のキリスト教的正統化

帝国主義的膨張政策（進歩）との承認

イスラエル史はキリスト教のデーモン化・逸脱に対する外的な基準となる。